台大日本語文研究第 29 期
2015 年 6 月，頁 47-73
2015-03-31 收稿，2015-05-27 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2015.29.47

試論琉球漢詩的一個面向
―與中國和日本的漢詩比較談起―

朱秋而*

摘要

近來學界對中國以外的漢詩文化圈的相關研究蓬勃發展，相較於以往漸漸受到更多學者的關注。透過重要作品的解讀和比較分析，瞭解各地區文學表現、思想性或是文化跨界等諸多問題，也已經累積了不少的研究成果。不過綜觀目前研究，不可否認的是仍以日本和朝鮮的漢學討論居多，琉球、越南和蒙古地區的探討相對有限。

這不過，位居中國和日本之間的琉球，自古在政治、文化、經濟和軍事上，在東亞世界有其重要地位的琉球，其漢學的成立和發展過程，一方面受到日本五山禪林的影響，另一方面也與明清兩代的文化交流有著緊密的關連，長期以來致力於琉球漢學的文獻考掘、整理和研究分析的琉球大學名譽教授上里賢一先生已經累積許多優秀的成果。

因此本報告擬在學界先進的琉球漢學研究基礎之上，從最早且舉足輕重的《中山詩文集》中歌詠琉球世子賜給本書編者程順則「鳳尾蕉」時，多位同僚詩人為紀其此殊榮時吟咏的十七首作品，透過與中國詩中的「鐵樹」描寫，還有江戶後期漢詩的「鳳尾蕉」詩以及芭蕉等許多俳句詩人吟咏的「蘇鐵」之詩歌意象與創作手法進行比較分析，期能藉此釐清琉球漢詩在東亞漢詩史上之特色與該如何評價的問題之一端。

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系教授

關鍵詞：《中山詩文集》、雪堂紀榮詩、鳳尾蕉、鐵樹、蘇鐵

臺灣大學學術
期刊資料庫

A Side View of Han Poetry in Ryukyu : Comparing Han poetry in China and Japan

Ju, Chiou-er*

Abstract

The recent studies on Han poetry in regions outside China thrive and thus receive a great deal of academic attention from scholars and investigators. It is the trend to interpret and compare the key works to know the issues on literature, ideology and cultural crossover in respective regions, which has exerted plentiful papers concerned. A holistic view into the present studies identifies research on Han studies in Japan and Korea as the mainstream and investigation on Han studies in Mongolia, Ryukyu (Okinawa) and Vietnam as minority.

Since the ancient times, Ryukyu between China and Japan geographically used to play the key role in the East Asian region politically, culturally, economically and militarily. Clearly, the launching and history of Han studies in Ryukyu used to receive Gozan zenrin (Japanese monks) in Kyoto Japan and tie closely with Ming and Ching Dynasties as well. Uezato Kenichi, the honorary professor, Ryukyu University, has many papers concerning Han studies in Ryukyu due to his long-term dedication and engagement in literature archeology, compilation and investigation.

With the previous papers, the author expects to clarify the qualities and evaluation of Han poetry in Ryukyu in the history of Han poetry in East Asia through comparing the image and approach concerning sago cited in 17 poems of peer poets in honor of Chen Shun-tse (Tei Junsoku).

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

the editor of Ryukyu Lyrics Anthology (the first work with the most significance) receiving sago from the Ryukyu prince and Sago cited in Chinese poetry, and sago poems in Han poetry in the late Edo period, and sago chanted by Matsuo Basho Haiku poet.

Keywords：Ryukyu (Chushan i.e. Central Mountain) Lyrics Anthology , Setsudokiei Poem, Hobisyo, Sago,Sotetsu

臺灣大學學術期刊資料庫

『中山詩文集』から見る琉球漢詩の一側面
—中国と日本の比較を通して—

朱秋而*

要旨

中国以外の漢詩文学圏の研究は近年、とくに注目され作品を通して、文学表現や思想性や文化的な越境等多くの課題が提起され、本家の中国と比較しながら、研究が盛んに行われ、一定の成果をあげている。これらの考察を地域的で見ると、日本や朝鮮の漢詩漢文に集中している傾向が否めない。ベトナム・琉球・モンゴルに関する研究は限られている。

が、中国と日本の間に位置する琉球は、文化や経済や軍事の上で非常に重要な役割を占めていることは周知のとおりである。その漢学の成立と流れも日本の五山と中国の明清との交渉と緊密な関係を有することは、琉球大学名誉教授の上里賢一氏先生の多くの優れた業績によって明らかにされている。

本報告は、これまで積み重ねられた先学たちの研究を踏まえながら、『中山詩文集』に詠じられた一連の「鳳尾蕉」詠を取り上げ、中国詩にある「鉄樹」と江戸漢詩に見る「鳳尾蕉」それに俳諧に登場する「蘇鉄」の表現と意味を分析比較し、漢詩史上における琉球漢詩の特色とその意味の一端を探ってみたいものである。

キーワード：『中山氏文集』、「雪堂紀栄詩」、「鳳尾蕉」、「蘇鉄」

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台湾大学日本語文学系教授

『中山詩文集』から見る琉球漢詩の一側面
—中国と日本の比較を通して—

朱秋而

一、はじめに

『中山詩文集』[1]は、琉球における本格的な漢詩文集の嚆矢と言われる。十八世紀前半に初版、十九世紀半ばごろに重訂版も刊行された。琉球王国時代の漢学の動向を知る、非常に貴重な資料である。

収録作品の中に、「雪堂紀栄詩」という一連の詩は、王世子が臣下の程順則に自分の庭に植えている「鳳尾蕉」を分け与えた。その御恩を記念するため、諸僚友たちは雪堂で十数首の紀栄詩を作った。例えば一首目は聲亭紫金大夫蔡鐸が詠じたもの、次に示しておこう。

古株如鐵葉蓁蓁　儲主移來賜世臣
堪與大夫同勁節　還宜君子共長春
慙予紀勝無佳句　羨爾傳家有異珍
從此庭中留寶樹　朝曦光照雪堂新

上里賢一氏はその成立について、「鳳尾蕉（蘇鉄）を贈られた一六九三年（康熙三二）だが、陳元輔の跋文は、程順則が進貢北京大通事として渡清し、福州で陳元輔に会った時に書いてもらったもので、成立はこの後ということになる。おそらく、つきの「雪堂燕遊艸」の成立と同じ九八年（康熙三七）だろう」と指摘している[2]。

「鳳尾蕉」は、日本の「蘇鉄」の中国名で、一般的には「鉄樹」と呼ばれる亜熱帯の植物である。本報告は「雪堂紀栄詩」の表現趣向を中国と日本の漢詩における「鳳尾蕉」の詠み方を比較分析し、琉球漢詩の特色の一端を明らかにすることを試みる。

二、中国詩に詠まれる「鉄樹」「鉄樹の花」

[1] 上里賢一氏『校訂本 中山詩文集』、九州大学出版、1998 年。
[2] 注 1 の「解説」、P31-32。

臺灣大學學術期刊資料庫

四庫全書等の検索によると、中国における鉄樹の詩詞は宋代までしか遡れない。『漢語大詞典』（上海古籍出版）の【鐵樹】についての説明はつぎのようなものである。

1. 植物名。一種葉似香蒲而呈紫色的樹。產於 廣東 。

● 宋　楊萬里 《歲朝發石塔寺》詩：

“佛桑解吐四時艷，鐵樹還如九節蒲。”

自注：“又有小木名鐵樹，葉似蒻而紫，幹似密節菖蒲。”

2. 植物名。蘇鐵的通稱。一種常綠喬木。葉聚生於莖的頂端，花不常開。

●宋　黃庭堅 《采桑子·贈黃中行》詞：

“西鄰三弄爭秋月，邀勒春回，箇裏聲催，鐵樹枝頭花也開。”

中国の詩文や記録を調べて確認したところ、鉄樹は二種類の植物を指している。一つ目は楊誠斎の詩と注に見えるように、葉っぱの形は香蒲に似ていて、色は紫の小さい植物である。もう一つは北宋の黄山谷の詞に「鉄樹の頂に花も咲いている」とあるように、日本で言う蘇鉄を詠んでいるは間違いないだろう。中国ではめったに花を見せない鉄樹の開花を珍重する傾向が早くも山谷の作品から先蹤を見ることができよう。

ほかの鉄樹を詠む中国の作品をほぼ時代順で挙げて、内容を検討してみよう。先ずは南宋の范成大『石湖詩集』に見る作品である。

① 至昌為具、賞東軒千葉梅、然梅尚未開。

玉葉重英意已芽　新移竹外小横斜

東齋何似春工晚　鐵樹已花梅未花

梅の開花が待ち遠しい対比として、鉄樹はもうすでに花を咲かせていることが引き合いに持ち出されている。南宋三大人の一人である范成大が詠んだ鉄樹は果たして蘇鉄かどうかはちょっと判断しがたいと思う。誠斎詩で詠まれた蒲に似ている植物の可能性もないではないが。続いては明代初頭の林弼（約 1360 年前後生存）,『林登州集』 巻二の

② 題黄誠甫鐵樹開花圖

臺灣大學學術期刊資料庫

刺桐城西仙母家　百年種徳如種花
春風吹暖滿庭院　坐見鐵樹開瓊花
瓊花的的簇丹穂　仙母見之一驚異
人名此樹狀元紅　偶爾開花必為瑞
阿兒讀書五車多　解來瑞應期無他
寫圖寄之喜欲舞　題品直上金鑾坡
玉堂多士誇珍奇　何異漢室生金芝
赤花光照永春縣　黄家瑞應無終期

「鉄樹開花図」を詠む題画詩のような作品である。たまにしか花を咲かせてくれない鉄樹の開花は瑞祥なしるしとしておめでたいと詠じられている。山谷の詞と同じ蘇鉄を詠んでいる一首である。明代後半の徐渭（1521 年－1593 年），

畫紅梅
即使胭脂點　猶成冷淡枝
杏花無此榦　鐵樹少其姿
挂壁紛紅雪　圍春在錦池
無由飄一的　嬌殺壽陽眉

紅梅の美しい姿には及ばないと、杏の花と一緒に鉄樹が引き合いに出されている。蘇鉄に好感を込めて詠んだものとは言えない。そして、やはり元末明初に生涯出仕せず、生涯隠居生活を送った陶宗儀（1329 年－1410 年）は《輟耕錄·金果》に

③ 泉州 萬年棗三株, 識者謂即 四川金果也, 番中名為苦魯麻棗, 蓋鳳尾蕉也。

とあり、「万年棗」·「金果」·「四川金果」·「苦魯麻棗」を連ね、これらはつまり「鳳尾蕉」のことと述べている。そして明末になると、謝肇淛（1567 年－1624 年）《五雜俎·物部二》にも「鳳尾蕉」つまり蘇鉄に触れている。

有鳳尾蕉, 其本粗巨, 葉長四五尺, 密比如魚刺然, 高者亦丈餘。

幹は太く、葉は長さは四、五尺で、魚のとげのように整然として並べている。

臺灣大學學術期刊資料庫

やや後の明の曹學佺（1574 年－1646 年),『石倉歴代詩選』 巻二百二十三 「 附 劉麟瑞 詩」である。

④ 沙洋堡裨將邊公居誼

兵威破竹列城驚　誰信偏裨不肯迎

兩箭離　　聲霹靂

二雄交斃氣崢嶸　可憐侯服微臣在

忍見人間大厦傾　萬木凋零風雪裏　空餘鐵樹一花明

激しい戦闘が行われていたが、今になって人間が建てた立派な建物も傾き、木々は風雪の中で傾き、空しくも一面映えているのは鉄樹が花を咲いている。芭蕉の「夏草や　兵どもが　夢の跡」と同工の趣を詠じているように見える。

清代に入ると、次のような例が見られる。清の高宗 『御製詩集』初集巻三十八

⑤ 廣濟寺鐵樹歌

石橋之北鳳城西　莊嚴浄域開招提

我来白晝考歳月　苔階偶撫昔人碑

石柱出廢址如幻　具足非然疑寶構

珠纓懸日月相好　特表天人師戒壇　左峙授摩羯擘窠

詩題を見ても一目瞭然のように、乾隆帝はお寺に植えられている蘇鉄を詩に詠みこまれている。そして清の劉璟 『易齋集 』に

⑥ 題梅

西湖處士骨已槁　髙節至今長不老

鐵樹開花今幾年　海水桑田幾騰倒

鐵樹花何清　知心更有宋廣平　我今為爾聯芳名

とあり、梅を詠む詩に鉄樹開花という特殊の習性が使われている。それに、『竹隱畸士集』 巻六の

⑦ 走筆謝仲達餉新橘詩

薄暮傳呼使者忙　兒童顛倒着衣裳

花開鐵樹何曾識　棗熟東家漫得嘗

厭客欲開丞相閣　絶交先寄洞庭香

臺灣大學學術期刊資料庫

直須載酒同君飲　免使繁枝怨曉霜

とあり、友人の好意に報いるお礼の詩作で、鉄樹が咲いても見分けることが出来ないと詠っている。

一方、明清時代の琉球関係記録に鳳尾蕉に関する描写が見られる。次のように記しておこう。

●戸科左給事中臨安 蕭崇業（？－1588），　編

行人司行人長樂　謝　杰　同編　『使琉球錄』卷下「羣書質異」

『大明一統志』土産、無鬬鏤樹。有鳳尾蕉、以葉翛然似鳳欲飛、故名之。四時不凋、此諸夏所無有者。

蕭崇業「航海賦」

「其草木、則石帆、鳳尾。紫絳綸組、抗莖敷蕚、布濩皐丘。

●兵科右給事中玉山 夏子陽（1552−1610 年），　編

行人司行人　泗水 王士禎　同編　『使琉球錄』

『大明一統志』土産鬬鏤樹、問之亦不知。或言其國有橘、小橘可作醯者。方言音頗相類、意即此物、然亦無足據也。有鳳尾蕉、以葉蹁蹁似鳳尾、故名。今閩中亦多有之。

●清 徐葆光『中山傳信錄』

奥山龍渡寺、…遍地植佛桑、鳳尾蕉等、頗可憩玩。

鐵樹、即鳳尾蕉、一名海椶櫚。身蕉葉、葉勁挺對出、襹褷如鳳尾。映日、中心一線、虛明無影。四時不凋、處處植之。

蕭崇業と謝杰が編纂した『使琉球錄』の「羣書質異」のところに「此諸夏所無有者」と、鳳尾蕉つまり蘇鉄は中国本土には無かったものだと述べ、琉球特有の植物であると認識されているようである。

しかし、のちの夏子陽と王士禎編の『使琉球錄』に、「有鳳尾蕉、以葉蹁蹁似鳳尾、故名。今閩中亦多有之」と、今中国の福建地方にも多く見られると書き記している。さらに、清の徐葆光『中山傳信錄』の中に、鉄樹という名前で琉球の名所にある鳳尾蕉の目だった景色を描いている。

以上、見ていたように、蘇鉄という植物はもともと中国本土に自生しているかどうかは、文献上では確かめがたいが、しかし歴史や

臺灣大學學術期刊資料庫

文学の上で鳳尾蕉

が注目され始めたのは、明清における琉球冊封史料と密接な関係があるのではないか。実は中琉における蘇鉄の交流はいかなるものかについて、上里賢一氏はすでに『閔江のほとりで一琉球漢詩の原郷を行く一』（タイムス選書Ⅱ・12、沖縄タイムス社、2001 年）という本の「鉄樹開花」一文に詳しく述べられている。ちょっと長い引用文になるが、琉球と中国の蘇鉄を考える上で非常に有益なご意見を提供してくれるので、全部示しておこう。

二月の中旬、京都のある私立大学の大学院博士課程で研究中の中国人学生が沖縄に来られた。中国で日本語科を卒業したあと、この私大に留学し、夏目漱石の研究をしておられる。彼女を案内して中・南部をまわった日は、車の窓を開けていても暑いくらい陽射が強く、平和記念公園では、木陰でソフトクリームをなめた。

中城城跡の古びた石垣の上に立つと中城湾の海がまぶしく、崖の下から吹き上がってくる風が涼しかった。その城壁の石に立つしがみ付くようにソテツが数本根を下している。いつも見慣れているものだし、別段気にもとめなった。彼女にはこの植物が珍しかったらしい。「あれは、それつですね？」「そうだよ。中国では鉄樹とか番蕉とか鳳尾蕉などといっていますね。」「これがソテツですか。上海の公園で魯迅の碑の近くで見た以外には、中国で見たことがないものですから……。」「ソテツの花、見たことないでしょう。見せてあげましょう。」「見たことありません。めったに咲かないんでしょう？」　「いいえ、沖縄では毎年、どこでも見ることができます。」

（中略）もう風景はどうでも良い。石垣の上や石と石との間にはえているソテツをみてまわった。花でけではない、小さいけれども実のついている株もある。彼女は、中国ではめったに見ることのないソテツの花を初めて見たばかりでなく、その赤い実まで手に取ることができて、幸運だ幸運だと、珍しい宝物

臺灣大學學術期刊資料庫

でも手にしたように喜んだ。私もつい嬉しくなって、ソテツあ雌雄別株であり、沖縄に自生いていること、かつては飢饉の時の非常食おして利用されたこと、そのため人工的に植えられ、今でも沖縄各地にソテツの群落があることなどを話した。

中国では、ソテツは広東省などの東南部に産すると言われ、その花は丁卯の年に一度だけ咲くと言われている。つまり、六〇年に一度だけ咲くわけで、そのため、「鉄樹開花」とは、いつまで待っても見込みがないことや不可能に近いこと、珍しいことなどの喩えとして使われていることである。…

一九八五年の夏、福建師範大学で開かれた沖縄と中国の学術会議の場で中琉の物産の交流に話題が及んだ時、イモ・落花生などと一緒にソテツが論議の対象になった。沖縄では、ソテツは中国から伝わったらしいと言っているのに、中国では逆に沖縄から伝わったと言われている。中国でも沖縄でもかなり古い地層からソテツの実や樹の化石が出土しているので、ずいぶん古くからある植物のようだ。たかがソテツなどと、軽く見てはいけないのかもしれない。中国と琉球交流史の意外な一面が隠されているかも知れないだから。

中国も沖縄も古い地層から蘇鉄の化石が発見されているから考えれば、植物学的にはどちらにもかなり古くから自生していたと思われる。しかし文化史的に認識されたのは、先ほど検討してきたようにかなり後のこととなる。中国では早くても北宋あたり、鳳尾蕉と呼ばれ認識がより全面的に定着したのは、恐らく明清を待たなければならないと言えよう。琉球の文化史の上でも同じく、中国文献の伝来によって、蘇鉄を鳳尾蕉・鉄樹・蕃蕉などの漢語名で再認識されたのであろう。上里氏が指摘されたように、蘇鉄は中琉文化交流史上、とても興味深い一例と言えよう。

次章は琉球漢詩に現れる蘇鉄の作品を検討してみよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、『中山詩文集』の「雪堂紀栄詩」と序文

琉球最初の漢詩集『中山詩文集』に収録される「雪堂紀栄詩」は、編者で三十六姓の久米村出身の政治家・外交官・教育者・文学者と高く評される[3]。程順則が才学と功績によって、王の世子からその庭に植えてある鳳尾蕉、つまり鉄樹・蘇鉄を贈られた時、同じ久米村の先輩や同僚たちがその栄誉を讃えて詠じた作品を収めている。詩の前に序文がある。次に示しておこう。

孤山栽梅、彭澤種柳、濂溪愛蓮、從來賢人君子、往往托之花木、以寓其簫然高寄、曠然物外之懐、風何古歟。至於召之棠竇之桂、田之荆王之槐、此又和氣致祥瑞、藹家國而流芳於奕世者。今程子寵文之以鳳尾蕉受賜於王世子也、則異是。蓋寵文爲中山喬木、有巖谷幽蘭之雅度、兼山川香草之風流。筮仕以來、雖舟車跋渉、莫敢告勞、知名於國中久矣。王世子愛其才、嘉其績、特沛此隆恩、殆異數也。按鳳尾蕉卽鐵樹、一名海櫻、勁節凌霜、饒有古意、毋亦勵乃節、而旌厥忠乎。誠可作傳家之寶、與尋常寵賚、徒作鑒賞之珍者、自有間矣。寵文膺茲曠典、拜手稽首、敬奉於雪堂中、是日開宴、集諸僚友賦詩紀榮、予思聖天子、握符御宇、聲教誕敷、而我王國夙被同文之化、亦駸駸有吟咏風、無吐鳳之章、聊效雕蟲之技、俾知栽培德意、千載一時、寧僅出内苑仙株、移賜近臣、爲班聯生色。已哉予忝從大夫之後、敬爲之倡云。

中山王府紫金大夫蔡鐸聲亭氏敬譔

序文を制作した蔡鐸（1644-1724）は琉球王国の外交史料の『歴代宝案』を編集した人物で、国政に深くかかわった三司官蔡温の父である[4]。内容は程順則（寵文）の受賜によって、雪堂で祝賀の宴を開き、久米村の同僚たちは詩を賦してその栄誉を分かち合ったというようなものである。この紀栄の詩宴を通して、寵文の尽力と貢献が世子に認められ、高く評価されたことは、久米村役割が重要視され、全体の地位の向上にも繋がっているようにも思われる。

臺灣大學學術期刊資料庫

[3] 同注１の「四　編者程順則について」に詳しい。
[4] 島尻勝太郎選、上里賢一注釈『琉球漢詩選』「蔡鐸」「蔡温」を参照。

程順則のほか、十二名の僚友があわせて贈られた鳳尾蕉（蘇鉄）を中心に十六首の紀栄詩を詠じた。一首目は序章に紹介した蔡鐸が詠んだものである。茂っている蘇鉄は受賜のめでたさと僚臣の士大夫の高潔な節操に喩えられ、子孫たちに伝わり、代々守っていくべき希世の宝物であるとその光り輝く栄誉は雪堂いっそう明るく照らし出していると。次は徳江正議大夫金元達が詠んだものである。

鐵樹頒來香滿座　雪堂開宴會羣英
微臣豈有凌雲賦　喜爲承恩一紀榮

この詩は律詩より短い七言絶句である。ご恩を受けて蘇鉄を頒ち得たことを平明に詠んでいる。そして祚菴正議大夫の蔡応瑞は

金盆捧鐵樹　賜自五雲邊
葉豈隨風落　花非浥露鮮
獨高君子節　不減大夫年
開宴雪堂上　恩光照素箋

と詠っている。高貴な方から賜った珍重すべき蘇鉄は、葉も花も一般のものと異なり、落ち葉せず、花は露を湛えず、まさに君子の孤高の節操や大夫の信念を表している。続いては賡橋中議大夫鄭明良の

海上仙櫻出日邊　恩光高照雪堂前
舊傳内苑長生樹　今見諸臣紀勝篇
霜落不愁凌晚節　庭閒正好度秋天
樹人樹木傳佳話　肯與山花共闘妍

である。この詩は蘇鉄のもう一つの漢語名の別名「海棕」[5]を使って詩想をめぐらしたものである。「仙櫻」の「櫻」は「棕」の正字である。内苑の長生樹で秋になっても凋落せず、節操を曲げない人のような喜ばしいはなしであると詠じている。本寧中議大夫の梁邦基は

[5] 『漢語大詞典』「海棕樹」の項目によると、
「明　李時珍 《本草綱目・果三・無漏子》: “千年棗、萬年棗、海棗、波斯棗，番棗、金果，木名海棕，鳳尾蕉。無漏子名義未詳。千年、萬歲，言其樹性耐久也。曰海，曰波斯，曰番，言其種自外國來也。”」とあって、「海棕」と鳳尾蕉は同じ植物と記している。

臺灣大學學術典藏資料庫

琪花瑶草自争新　特出仙櫻賜近臣
内苑古株張鳳尾　東封喬木捲龍鱗
園中作賦鄒枚侶　花裏題詩漢魏人
今日開筵同紀勝　年年唯見雪堂春

とうたっている。爾兆都通事の蔡灼も

儲君特賜海櫻花　古色何曾借晩霞
紅紫讓他桃李艶　獨留鐵骨傲霜華

蘇鉄を「海櫻花」と詠んでいる。鉄骨のような幹と茎は霜にも負けない。さらに得聲副通事の梁鏞は

雨露偏教鐵亦芳　榮分古樹沭恩光
枝枝捧日承天眷　葉葉臨風擬鳳翔
湖海每驚鱗甲動　冠裳猶帶海櫻香
從兹世作傳家寶　共譜新詩上雪堂

「鐵亦芳」「擬鳳翔」「鱗甲動」「海櫻香」のように、蘇鉄を鳳や龍に擬えて、芳しいや香りでその特殊な一面を捉えている。得濟副通事の梁津が詠じた

東封苑裏有天葩　移賜河南立雪家
似鐵未曾緣火鑄　如櫻寧肯受風斜
龍騰瀚海鱗籠日　鳳起高岡尾帶霞
沈約偏難臨綺席　但將寸管紀光華

という作品も「龍鳳」に比喩されている。もう一首。

鐵木由來天上枝　恩深偏爲近臣移
酬功不待膺封日　樹德尤宜未老時
鳳尾翩翩張夜月　龍鱗點點映朝曦
雪堂今日新承寵　紀勝原須共賦詩

得剡太學生都通事の梁成楫もはやり「鳳尾」「龍鱗」で蘇鉄の高貴さを際立たせていて前の二首と類似な手法を駆使して、描いている。天受太學生都通事の阮維新が詠んだ次の作品は龍や鳳の比喩表現は見られず、「祗寄傲」といって尊い節操は「孤竹」よりも清く、それに「不知寒」と一年中葉の色が変わらないことは「畹蘭」よりも勝

臺灣大學學術期刊資料庫

っている。

一株鐵木豈能殘　儲主時常帶笑看
葉向高秋祗寄傲　枝臨深夜不知寒
論清未肯輪孤竹　争翠從教過畹蘭
此日雪堂承寵賚　年年花裏報平安

天章太學生都通事の蔡文溥の場合は、律詩一・絶句四、合わせて五首が収録されている。

千年鐵幹出風塵　勵節偏宜賜近臣
葉帶霞光開鳳尾　樹多烟甲起龍鱗
雪堂膺寵聲名重　東苑酬功德澤新
莫怪海濱無紀勝　筵前尚有賦詩人

又七截（絶）四首

鐵木錚錚獨耐冬　青枝依舊帶春容
看來似在波濤裏　彷彿鱗生欲化龍

不與閒花共度年　獨宜雪後與霜前
非金非石能如此　莫是盆中別有天

古幹從來不肯秋　亭亭勁節有誰儔
徂徠若續當年譜　好把仙櫻筆下收

寶樹遥從内苑來　承恩移向玉盆栽
雪堂紀勝徵詩日　多愧予無子建才

下線部を見れば、すぐわかると思うが、「龍鱗」・「鳳尾」に喩えられ、「霜」「雪」に冒されずなど尊貴な出自や毅然としている節操を有する鉄木が詠まれている。それに浩然副通事の金溥の次の作品も

頒來鐵樹有輝光　豈與尋常草共芳
日照龍枝鱗甲動　風來鳳葉羽毛翔
托根内苑曾沾露　移植中庭不礙霜

臺灣大學學術期刊資料庫

立雪堂前承寵後　徂徠高並古松蒼

分析してきたように、「鳳尾蕉」を詠むとき、ほぼパターン化した「龍」・「鳳」・「霜」・「露」の表現で蘇鉄と友人程順則がご恩をこうむった名誉な出来事を詠じている。

そして最後は「奉答諸公讌集雪堂賦詩紀榮」は一連の詩の締めくくりである。

承恩特賜鐵蕉花　栽向金盆長綠芽
清葉不沾凡雨露　新枝常帶早烟霞
文星照耀開樽地　寶樹芬芳立雪家
何幸得邀詞賦客　草堂今日有光華

雪堂主人程順則が宴会に参加し、紀栄詩を作ってくれた諸氏に応酬した作品である。「鐵蕉花」という「鳳尾蕉」と「鉄樹」を自由に組み合わさった蘇鉄の新しい詩語は面白い。

この一連の鳳尾蕉詩は、実は『中山詩文集』の出版よりも早く、中の数首は『皇清詩選』にも選ばれている。第二章と比較して見れば、下賜された世子内苑の「蘇鉄」を中心に詠まれた「雪堂紀栄詩」は中国の漢詩史上にかつて見たことのない「鳳尾蕉」詠を繰り広げていることが一目瞭然である。

一方、日本漢詩や他の日本の文芸に蘇鉄はどのように取り扱われているのかも検討の視野に入れなければならないと思う。

四、江戸漢詩・俳諧・庭園・絵画に見る蘇鉄

近世以前の日本漢詩に鳳尾蕉を詠む作品は、調べた限り、今のところはまだ発見できない。『日本国語大辞典』を頼りに見つけた古い記述は次のようなものである。

＊文明本節用集〔室町中〕「蘓鐵　ソテツ」

＊蔭凉軒日録-長享二年〔1488〕九月一六日「興文首座話云、大内庭にそてつと云草あり。自高麗来。かふより葉出而。一間にははかるほとなり。せんまいの大なるやうな者也」

室町中期文明年間の『節用集』に「蘇鉄」が収録されている。ま

臺灣大學學術期刊資料庫

た時期がそのすぐあとの長享二年の相国寺鹿苑院内の公用日記に、庭にある「そてつ」に言及している。高麗からもたらされたという現在から見れば明らかにミス情報も混在している。このごろ京都の庭造りに新しく加わった外来の植物だろう。それから近世に入ると、『浮世草子』の

＊好色万金丹〔1694〕一・一「妙国寺のより見事なる蘇鉄（ソテツ）三本」

と妙国寺にあるすばらしい蘇鉄が取り上げている。それに少し後、寺島良安が著した『和漢三才図会』（1712 序）巻十六【蕃蕉】という項目に次のように引用と説明がされている。

華人は鉄樹という。

○明の謝肇淛「五雑組」に次のようにいう。伝えによれば、この樹は琉球から来たものといい、これを植えるとよく火患を防げえる。

思うに、蕃とは外夷の呼称である。状が鳳尾蕉に似ているので蕃蕉という。かれかけたときには、その根に釘をうつと生きかえる。それで日本では蘇鉄という。もとは琉球の産で、薩州に多くある。現今はあちこちの庭園や鉢に植えて珍重している。

おおきなものも小さなものも愛すべきものである。

寺島良安は『五雑組』を引用し、「鳳尾蕉に似ているので、蕃蕉」といい、日本では蘇鉄と言っている。原産地は琉球と確定し、薩摩にも多い。庭園や鉢によく植えられる[6]。

そして『和漢三才図会』よる約五十年後、上方漢詩壇で活躍した天台僧六如上人（1737-1801）の『六如庵詩鈔』遺編に「鳳尾蕉」と題する一首が見られる。

勁葉鋸牙利　孤莖銕甲重

氣能千碧漢　性頗惡嚴冬

[6] 『国語大辞典』の「蘇鉄」項の説明は、「ソテツ科の常緑低木。九州南部、沖縄および中国南部に生え、観賞用に栽植されることも多い。（中略）漢名、鳳尾蕉、番蕉、鉄樹。学名は Cycas revoluta 《季・夏》」とある。

臺灣大學學術期刊資料庫

月裡鬚鬢影　風前拓落容
莫教瀕水種　只恐化為龍

首聯は葉の強靭さや枝分かれしない茎という蘇鉄の特徴をしっかり捉えている。この手法は「雪堂紀栄詩」の琉球漢詩の余り変わらない。しかし寒さに弱いという正しい情報や観察が新たに盛り込まれている。宋詩の真実に基づく緻密な観察眼が、器用に働いているといえよう。しかし、尾聯になると、水辺に植えると、龍に変じる恐れもあろうと詠じる。六如とほぼ同世代の儒者尾藤二洲(1745-1813) の『静寄軒集』巻二に、「同塾生分咏園中諸卉、得鳳尾蕉、韻十四寒」という作を見ておこう。

緣是園中地自寛　假山還覺託身安
不從桃李嬌春景　且與松杉傲歳寒
雨霽蒼龍髯尚動　風來翠鳳尾將殘
誰知疇昔城門火　能使主人卧裏看
（注：鋏蕉能辟火故末句及客歳免災事）

頷聯の「不從桃李」や「傲歳寒」・頸聯の「蒼龍」や「翠鳳」という詩歌表現は「紀栄詩」の詠み方に通じている。しかし、見逃してはいけないのは作者が注記した「蘇鉄」が火災を防げるという俗信を詩の尾聯に取り入れた。同時代儒者・詩人、もう一人は頼春水(1746-1816) である。彼の詩集『春水遺稿』にある「春盡過尾路、題草香生鳳尾蕉軒」七絶は

芳樽今夜有盟尋　廿載交情感慨深
不管人間紅事盡　鐵蕉無恙歳寒心

とある。書斎を鳳尾蕉軒と名づけた草香生のために詠じた詩作である。また、池桐陽(1765-1834)の『 桐陽詩鈔』の「題鳳尾蕉」詩は

烟籠露灑兩相宜　且想秋霜實熟時
怪說安期東海棗　試吟子美左綿詩
龍鱗日出眠猶穩　鳳尾風高舞屢移
敢比群芳付攀折　一株鋼鐵不成枝

「鳳尾蕉」を題詠するものである。詩の前半は蘇鉄の実に注目し、

臺灣大學學術期刊資料庫

「東海の棗」は『晏子春秋』外篇下十三にみる伝説上の果物である。その対に杜甫「海棕行」の「左綿公館清江濆　海棕一株高入雲」を踏まえている斬新な一面を見せていると思う。詩の後半は蘇鉄を龍鳳に比喩し、幹が鋼鉄の如くほかの花々より抜きん出ているという伝統的な詠法で締めくくっている。

近藤篤山(1766-1846) 『篤山遺稿』の「初冬石黒氏招飲、席上賦謝、麒麟角・鳳尾蕉・冬至梅・寒菊諸卉、亦皆爲席珍、故詩中云」は

高堂夜宴既三更　霜滿階前銀燭明
談笑移時歡不盡　献酬無算興逾清
孤盆鳳尾隨麟角　十月梅花接菊英
多謝主人寛待意　風流最適隱淪情

梅、寒菊等と並んで「孤盆鳳尾」と鉢植えされた蘇鉄が儒者・詩人らの雅遊の席で賞玩される。今までの漢詩に見たことがない盆栽化された蘇鉄が、登場した点は興味深い。当時の園芸の好尚と密接な関係を垣間見ることができよう。

ほぼ同じ時期に活躍した詩人大窪詩仏(1767-1837) の『詩聖堂詩集』 二編と三編にそれぞれ一首ずつ「鳳尾蕉」五言絶句を収録している。次のようなものである。

曾聞青鳳尾　能有辟火功
願得千萬本　種満荏城中

一句目は漢語名「鳳尾蕉」の連想による比喩表現から歌い出し、二句目から結句までは火災の発生を防げる俗信から想像を膨らませている。江戸城中に千万本も植えたいという誇張的な表現を取っている。近藤篤山の「孤盆」と呼応するように詩仏も「小盆鳳尾蕉」と題して、次のように詠っている。

風吹新葉舒　重重如張翼
莫道三寸小　猶以鐵為食

江戸後期の園芸ブームと日本人のミニチュア趣味をよく現している短詩と指摘したい。検討してきたように、十八世紀半ばごろから、

臺灣大學學術期刊資料庫

蘇鉄が漢名「鳳尾蕉」で詩の素材として突如江戸の漢詩に出現した。室町中期ごろ上方や江戸にもたらされた蘇鉄は、近世中期の植木の流行によって普及したと思われるが、近世詩歌の代表選手である俳諧とのかかわりはないか。果たして日本漢詩独得なテーマ・素材などを確かめる必要があろう。電子版『古典俳文学大系』(集英社、2004)で蘇鉄が含まれる句を調べたところ、次のような作品が見られる。俳書にも収録されている。

03-006	大坂独吟集	句	8	蘇鉄まじりの浅あさ茅ぢ生ふの宿
03-007	信徳十百韻	句	909	蘇鉄あり鳥に唐有り大和とあり
03-021	東日記	句	870	蘇鉄の葉にて葺し庵有リ
04-025	大坂辰歳旦	句	172	春明けて蘇鉄笠ぬぐ薗生ふ哉
05-001-032	芭蕉発句	句	584	門に入ればそてつに蘭のにほひ哉
05-001-032	芭蕉発句	句	584 a	門に入れば蘭に蘇鉄のにほひ哉
05-002-058	世に有(百韻)	句	6	蘇鉄の亭チンに題を設クる
05-002-067	田螺と(世吉)	句	26	蘇鉄に霙とは涙なる
05-002-068	月と泣(歌仙)	句	16	蘇鉄に刻む髭の毛薑
05-002-124	時は秋(歌仙)	句	27	風の音並ぶ蘇鉄のいかめしく
05-002-130	めづら(歌仙)	句	13	霜覆ひ蘇鉄に冬の季を籠めて
05-006-003	田舎の句合	句	44	雪にとへばかれも蘇鉄の女なり
05-006-003	田舎の句合	他	45 前	左の句は、お（を）かしき所に風情をめて風情あり。適山家のけし
06-001	武蔵曲	他	1 前	今はむかし、逍遥遊 1 いうの翁といふものあり。細 2 河のながれに
06-001	武蔵曲	句	46	蘇鉄鳴ないて老母草は霜の笑草
06-001	武蔵曲	他	196 前	蘇鉄林　千春
06-002	虚栗	句	177	仙家にはわさび（濁ママ）摺するらん蘇鉄原
06-002	虚栗	句	248	葉越ごしはあらぬ蘇鉄一株（濁ママ）
06-002	虚栗	句	485	芭蕉の女ねたし蘇鉄に釘打

臺灣大學學術期刊資料庫

06-008	其袋	句	498	蘇鉄には宿らぬ月の薄すすきかな
06-020	炭俵	句	420	箒目に霜の蘇鉄のさむさ哉
06-021	其便	句	356	松と蘇鉄の間何間
06-022	笈日記	句	707	門に入れば蘇鉄に蘭のにほひ哉
07-001	葱摺	句	284	こがらしにひとり撓ぬ蘇鉄哉
07-003	句兄弟	句	378	忘れ水捨て蘇鉄の塩を出す
07-011	陸奥衞	句	825	蘇鉄見よとや炉路明あけて置く
07-011	陸奥衞	句	1341	飛かへる音は蘇鋲の霰哉
07-019	国の花	句	2839	岩間の蘇鉄雨の雪にも
07-019	国の花	句	2968	蘇鉄など霜をいとふや高枕
08-004	一笑(金沢)	句	57	あらば分わけん蘇鉄の林ほととぎす
08-021	其角	句	48	雪にとへバかれも蘇鉄の女なり
08-094	曽良	句	89	風蘭の先や蘇鉄の八九本
09-017	桃隣	句	322	蘇鉄にも厚き手て当あてや霜覆ひ
09-030	百里	句	211	山田守蘇鉄になれば石蕗の花
09-044	卜尺	句	9	蘇鉄鳴いて老母草＜ヲ（オ）モト＞は霜の笑ひ草
09-062	野坡	句	536	白壁に照るや蘇鉄の下つつじ
09-064	游刀	句	11	箒目に霜の蘇鉄のさむさ哉
09-088	露川	句	534	常盤なる蘇鉄に匂へ玉つばき
11-001	金龍山	句	510	能は蘇鉄を馴じまする人
11-001	金龍山	句	894	蘇鉄の露の榑木扱ひ
11-010	四時観	句	26	蘇鉄を植ゑにかるさん軽袗で来る
11-021	麦林集	句	587	秋はあの伊吹に有て蘇鉄山
13-015	五車反古	句	361	大名をとめて蘇鉄の月夜哉
13-016	春秋稿	句	984	うめの雫落て蘇鉄に匂ひけり
13-031	しら雄句集	句	945	鬼歯朶も蘇鉄も雪の旦かな
14-010	加佐里那止	句	359	星きらきら寒き蘇鉄のむしろ哉
15-001-017	一茶発句	句	730	小夜砧孤きて蘇鉄立ちにけり
17-004	玉海集	他	2389 前	妙国寺の蘇鉄をみて

臺灣大學學術期刊資料庫

17-004	玉海集	句	2389	つもれかし玄冬蘇鉄庭の雪
17-005	毛吹草	他	363 前	蘇鉄　棕櫚ノ毛　　黄楊ノ木櫛ニ用之
17-008	俳諧類船集	他		むしろ　つつじ　三味線　あはもり 蘇木　蘇鉄　薩摩　もだ

すぐわかるように、俳諧の蘇鉄の句は多種多様な詠み方を呈している。囲った作品を見ておこう。芭蕉（1644-1694）が詠んだ「そてつに蘭のにほひ」や弟子曾良「風蘭の先や蘇鉄」のように、蘇鉄と蘭の取り合わせは、「紀栄詩」の鳳尾蕉詠にも見える。ほかにも「霜」「露」「雪」「寒さ」「松」「常盤なる」で蘇鉄の高潔さを現するところは似通っている。芭蕉の没年から類推すれば、ソテツ句の成立は程順則らの「雪堂紀栄詩」より早かったようである。芭蕉の前の俳人信徳たちはすでに蘇鉄を俳諧に取り入れていることが明白である。

しばらく眼を近世の絵画に転ずれば、次に掲げる画家の俳人である蕪村の「蘇鉄図」がある[7]。明和五年（1768）に描かれた作品である。

[7] 尾形仂・佐々木丞平・岡田彰子編『蕪村全集』第六巻、「絵画・遺墨」、講談社、1998 年。

臺灣大學學術期刊資料庫

〔讃岐滞在〕 148

〔右隻〕

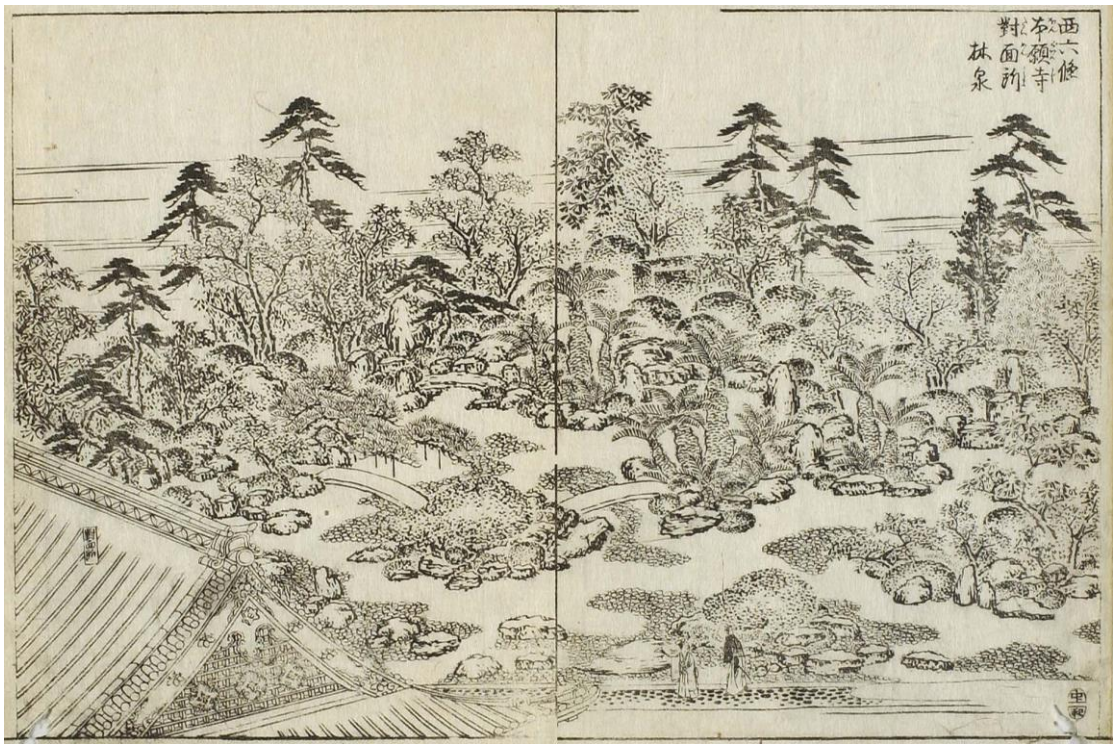
〔左隻〕

202
蘇鉄図
紙本墨画　四曲屏風　一双
各一六一・五×三六五・八cm
款「階前闘奇　酔春星写」〔左隻〕
印「謝長庚」（白文方印）「謝春星」（白文方印）〔左隻〕
妙法寺蔵

203
山水図（次ページ）
紙本墨画　四曲屏風　三隻
各一六〇・〇×三六七・〇cm
款「明和戊子夏四月　謝春星写」〔左隻〕
印　不明
明和五年（一七六八）
妙法寺蔵

そして約三十年あと、蘇鉄の庭が壮大に描かれている『都林泉名勝図会』が見られる。寛政 11 年(1799)年に刊行されたもので、『都名所図会』と同じく本文は京都の俳諧師秋里籬島が著し、挿絵は佐久間草偃、西村中和、奥文鳴の三名が描いた墨摺五冊本である。また、『都林泉名勝図会』は京都の吉野屋為八、江戸の須原屋善五郎から刊行されたものである。次に示しておこう。

臺灣大學學術期刊資料庫



実は蘇鉄の絵は日本内部のみならず、十七世紀初頭に薩摩藩の支配下になった琉球国の呉継志がまとめた『質問本草』（乾隆五四、寛政元年成立）という重要な本に、つぎの面白い蘇鉄の挿絵が載っている。

蘇鉄と白梅［挿花月のさかえ］　そてつ［質問本草］

臺灣大學學術期刊資料庫

五、結びに

「鳳尾蕉」は『本草綱目』や『三才図会』など蘇鉄の中国語の言い方の一つでありながら、福建省等限られた地域の植物で漢詩史上では、非常に弱小でマイナーな存在で、詩語としては全く取り扱われてなかったようである。強いて言えば中国でより一般的な呼び方「鉄樹」とそのめったに花を咲かない性質がかろうじて詩作に取り入れるのみである。

しかし、中国と違って琉球は「鳳尾蕉」即ち「蘇鉄」の名産地として知られている。日本の場合は、『文明本節用集』〔室町中〕「蘓鐵ソテツ」や『蔭凉軒日録』-長享二年〔1488〕九月一六日「興文首座話云、大内庭にそてつと云草あり。自高麗来。かふより葉出而。一間にははかるほとなり。せんまいの大なるやうな者也」という記述が見られる。室町後期から庭の植木として愛好されていたようである。江戸時代になると、芭蕉の「門に入ればそてつに蘭のにほひ哉」をはじめ、多くの俳諧が詠まれた。そして清新写実な詩風を唱える江戸後期の漢詩人にも好んで作品に取り入れられた。

中国と日本の「鳳尾蕉」の詩歌と比べてみると、一組の「雪堂紀栄詩」は紀栄詩の伝統的な方法を使っているが、琉球の特色をしっかりと捉え、今まで漢詩史上に無かった蘇鉄詠を生み出したと言っても過言ではないだろう。琉球漢詩の全体的な特色を把握するには、より多くの詩人と作品を検討しなければならないが、今後の課題とさせていただきたい。

【付記】2014 年 12 月に琉球大学の「東アジア文化交流の学際的研究」シンポジウムで初稿を発表した際、上里賢一先生より、貴重なご教示を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。なお、本稿は発表したものを大幅に書き直したものです。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

岩波講座『日本文学史』第 15 巻「琉球文学、沖縄の文学」岩波書店、

1996 年。
村井章介『東アジア往還』、朝日新聞、1995 年。
上里賢一『沖縄文学全集』第二〇巻、国書刊行会、1991 年。
比嘉実「琉球文学概論」『言語　総合特集・沖縄入門』、大修館書店、1983 年。
川口久雄「琉球文学の世界」『国学院雑誌　佐藤謙三博士追悼号』、1975 年。

臺灣大學學術期刊資料庫